

若年層にも
拡大する

婦人科がん

熊本大学大学院生命科学研究部産科婦人科学教授
公益社団法人日本産科婦人科学会男女共同参画・女性の健康集会委員会委員長

片 瀧 秀 隆



3月1日～3月8日は厚生労働省も主唱する「女性の健康週間」です。今回は女性特有の婦人科がんについて熊本大学医学部産科婦人科学の片瀧秀隆教授にお尋ねしました。

女性の健康週間と婦人科がんについて

「女性の健康週間」は、女性の健康を生涯にわたってかかりつけ医として産婦人科医が支援することを目指し、2005年に始まりました。3月1日から「国際女性の日」の3月8日までで、ひな祭りの3月3日を間にはさんでいます。今年も、「丸の内キャリア塾 女性の健康週間セミナー」を3月5日、6日に「女性がじぶんで決めること」をテーマに東京で開催します。また、全国各地でも市民公開講座が企画されています。これに先だって、1月17日にプレスセミナーを開催し、昨年産婦人科の領域で話題になった「風疹の流行」、「卵子の老化」、「出生前診断」、「HPVワクチン」、「女性の遺伝性がん」を中心に専門家による講演を行いました。この5つに共通するのは、20代から40代の女性にかかわる問題であることで、その中には中高年の病気と考えられがちな「がん」のことが2つも含まれています。

産婦人科で治療する3大がんは、子宮頸がん、子宮体がん、卵巣がん、日本人女性のがんの1割にあたります。

これらが、他のがんと大きく異なるのは、「生活臓器」ではなく、「生殖臓器」のがんであること、20代・30代にこれらの病気にかかる自分と自分が出産できない悲劇につながることを意味します。特に、子宮頸がんは、子宮を残すことの出来る初期癌を含めるとその半分がこの年代に発症します。また、がんの5～10%を占める遺伝性がんの発症も30代・40代から始まります。婦人科がんでは、帯下(おりもの)の変化、不正性器出血(月経以外の出血)、下腹部痛、腹部膨満感や腰痛などが代表的な症状ですが、初期の段階では無症状であることもしばしばです。この時期に早期発見するためにいち早く1982年に導入されたのが子宮頸がん検診で、厚生労働省は、全てのがん検診の中でこの検診が最も有効であると評価しています。しかし、日本における受診率は20%台で、先進国の中で最低です。自分が生まれた場所である産婦人科の重要な役割を正しく理解して、大人になったらその産婦人科で受ける検診を習慣のひとつにして頂きたいというのが産婦人科医全てが切望していることです。

3/1～8は「女性の健康週間」

女性が生涯を通じて健康で明るく、充実した日々を自立して過ごすことを総合的に支援するため、国や地方公共団体、関連団体が一体となり、さまざまな活動を展開しています。

産婦人科で治療する3大がん

●子宮頸がん

子宮の下3分の1の場所にでき、原因のほとんどがHPV(ヒトパピローマウイルス)の感染によるものです。現在はライフスタイルの変化などにより、女性の初交年齢が低くなったことも一因となり若年化が進行しています。

●子宮体がん

赤ちゃんが宿る奥3分の2の子宮内膜から発生し、子宮内膜がんとも呼ばれています。卵巣ホルモン(エストロゲン)という女性ホルモンが深く関わっており、卵巣ホルモンの持続的な刺激で子宮内膜増殖症を経て発生することが知られています。

●卵巣がん

卵巣に発生する腫瘍で数cmから大きいものでは30cmを超えることもあります。卵巣腫瘍には様々な種類があり、その発生起源から表層上皮性・間質性腫瘍、性索間質性腫瘍、胚細胞腫瘍などに大別され、それぞれに良性、境界悪性、悪性と分類されます。

婦人科がんは早期発見が重要です。
定期的な検診を習慣づけましょう。

